



加藤 元の



と暮らして
みませんか

44

動物たちと身近にふれあうことは、すばらしいことです。また、人と動物との間に生まれるきずなが、人と動物双方の心身によい影響を与えあうことも、科学的に証明されています。

人と動物の豊かなふれあいは、脳の正常な発達にも、よい影響を与えるようです。とりわけ、子供たちの脳の発達には、人と人、人と自然、そして人と動物の豊かなふれあいが必要です。

子供たちの脳の発達は、「社会化の感受性期」（出生から十歳までの脳の発達速度が最も速い時期）をどう過ごさせるかにかかっているといっても良いです。感性、個性、主体性、思いやりなどは、大切な社会化の感受性期にこそ育つのです。

子供たちは、人、動物たち、自

身近なふれあい

子供の優しさを育てる

然と十分にふれあい、他の生きものの命を感じ、生と死の存在などを体感・体得し、気付いたときに初めて、脳の成長そのものに取り込まれていくのです。

動物とは言葉で会話することはできません。「直感の世界」ポディランゲージの世界」で、その動物たちが訴えているもの、必要とするものを理解してやらなければならぬのです。

子供たちが、うまく動物の気持ちに伝えることができると、犬や猫の素直な喜びの反応が返ってきます。それは、感動として子供たちの脳に取り込まれ、動物だけではなく、人に対してもやさしい気持ちで接する大切さを無意識に蓄積することになります。

こうして子供たちは、達成感や自尊心、思いやり、弱者をかばうことの素朴な正義感などを、単なる知識ではなく、体感・体得していくのです。

いじめ、不登校、学級崩壊、家庭内外の暴力などが問題化する現代社会では、犬や猫や自然とのふれあいが必要不可欠ではないでしょうか。犬や猫たちと仲良く上手に暮らすことは、人と動物との双方の心身に良い影響を与え合うのです。

（ダクタリ動物病院広尾病院院長、日本ヒューマン・アニマル・ボンド・ソサエティ会長）

《産経新聞2005年2月20日掲載》